# 歩李の幽霊日記

西秋　真衣夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歩李の幽霊日記

【Ｎコード】

Ｎ７０００Ｃ

【作者名】

西秋　真衣夏

【あらすじ】

霊が見える、主人公の月橋歩李が佐野千里と事件にまきこまれてしまう話。

## 【第1話：愛美ちゃん】

あたしは月橋歩李。
あたしには、幼なじみの
佐野千里というヤツがいる。
あたしは、そいつとはものすごぉく
仲が良いと思っている。
もっと関わってしまうことになる。
そんなコトは何も知らずに、
のんきに中学校から
帰ろうとしてたあたし達。
「帰るぞ！歩李ぃ！」
千里はいつもそう言ってくる。
ハー・・・
「わかってるよっ！」
ったく・・・
「早くしろよぉー！」
はいはいっ・・・ってうるさいわ！

そして、歩きはじめるといきなり
あたしの顔を覗きこんでくるんだなー
これが、またウザくて・・・
「もー！！毎日毎日やめてよー」
これが日課です・・・

あれ？千里がいない・・・
いつの間に・・・？
でもいても、いなくても
どーでもいいから、

気にせずまっすぐ家に
帰ります！
ということで一人で帰ってました。

・・・一人で帰るって耳鳴りとかしません？
なんか今日はくらいなぁー・・・
あはははは・・・
鳥肌がたつ。
背筋がゾクゾクしてくる。
まったくそんなカンジでした。
幽霊かな？
それならでできてみなさい！
おっほほほほほぉ！
みたいなカンジでなにも
考えないようにがんばりました。
でも・・・
あしおとが・・・
あはは・・・まーさか・・・
でも、振り向かずにはいられなかったんです。
ゆっくり・・・
ゆっくりと、
ものすごくゆっくりでしたけど、
首を後ろに向けることに成功しました。
・・・え？
「愛美ちゃん？！」
ー愛美ちゃんーというのは
隣の家の子です。
幼稚園の年長さんなのです。
とってもかわいぃのです！
よく、あたしのうちに遊びにきてくれるんで、

仲良しになりました。
「どーしたの？」
・・・ってん？
今あたしが帰ってる時間って・・・
なんとなくケータイを出して見てみると、
１８：４０？！
「早くおうちに帰ったほうがいいよ？ね？」
そう言うと、愛美ちゃんはしゃべりだした。
「・・・かれたの・・・」
「ん？枯れた？」
「・・・ひかれちゃったの・・・」
へ？？ひかれた？！
時間は１８：４２。
「だだだだだれが？！」
愛美ちゃんは泣き出した。
「あ・・・愛美がひかれたのっ・・・」
え？
そのとたん、愛美ちゃんが血だらけ・・・
目が取れていて・・・キズだらけ・・・
「いやあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
なんなの？！あたしは泣きそうになった。
「あ・・ごめんね・・・
歩李あねえちゃん・・・
怖がらせちゃって・・・
でも、言いたいことがあったの！」
何？これは夢？時間は１８：４４・・・
「あのね・・・
今までありがとう！
歩李おねえちゃん、ダイスキ！
・・・もう逝かなきゃ・・・

バイバイ・・・」
さいごに、愛美ちゃんはニッコリと笑った。
そして、消えてしまった。

そしてホントに愛美ちゃんは
大型トラックにひかれて、
息をひきとってしまいました。
ちょうどあの時、愛美ちゃんを見た
１８：４４に・・・

あたしにお別れしに来てくれて、
ありがとう。愛美ちゃん・・・
あたしも、愛美ちゃんのこと、
ダイスキだよ・・・

## 【第2話：危険】

「だーかーらー」
歩李はうんざりしていた。
「だーって、昨日途中から
いなくなったろ？
　オレ！なあ！
　それは、マンガ買いに行ってたからだ！」
それがどうしたってゆーの？
的な目で千里を見てると、
「途中で戻ったんだよ！
　追いついたんだよ！歩李に！そしたら・・・
　お前、一人でしゃべってたんだよ・・・
　なにしてたんだ？
　愛美ちゃん！とかいってたぞ？」
・・・ちょっとまって・・・
「独り言？ちがうってば！
　幽霊の愛美ちゃんと
　はなしてたんだよ？！」
そう言うと、
「は？ばっかじゃねーの？」
そう言われた。
そしてギャーギャーと
ケンカっぽくなった。

その姿を見つめる、
ひとつの影があった・・・

「帰るぞ！歩李ぃ！
あんまん食いてぇから、
ついでにおごれ。」
無視しよう。
「か・え・る・ぞぉぉぉ！」
走って逃げよう。
「歩李ぃぃぃぃ！！
あんまんはー？！おいっ！」
あのバカ！ったく・・・
「あの・・・」
「はい？」
そこには、
見知らぬ女の子がいた。
見た目はとてもおとなしそうな子だ。
右目が髪で隠れている。
首にはコウモリのような
マークがついている。
「歩李さん・・・ですよね？」
「そうだけど？」
するとしゃべりだした。
「私、山里雪と言います。
転校してくることになってます。
仲良くなっておこうと思って・・・
あ、同じクラスです。
よろしく。」
ふーん・・・
「あ、うん。よろしく・・・」

そんなふうに仲良くなっていく

転校生の雪。
危険はすぐそこに
近づいてきていた。

「雪ちゃん！帰ろっ！」
「うん。」
雪ちゃんと仲良くなったよ～！
雪ちゃんといると、
あのバカ千里を見ないですむ。
フツーに無視できる。
やったー！！
でも帰り道に後ろからついてきてるけど、
無視っ！
すると雪ちゃんがいきなり止まった。
「どーしたの？」
答えてくれない。
「雪ちゃん？どぉしたのっ？」
すると、ゆっくりと口を開く・・・
「・・・てくれる？」
「え？」
「来てくれる？」
こんなことを言い出す。
意味が分からないので、
「なに？どこかに行きたいの？」
と聞く。
「いっしょに来てくれる？」

睨むようにあたしを見る。
あたしは動けなくなってしまう。
それほどの睨み方。
おもわず
「う・・・うん。」
すると人間とはとても思えないような
笑い方をする。
裂けた口からは鋭いい牙が光る。
そしていきなりあたしの腕をつかむ。
振りはらうことのできないほどの強い力で。
しばらく引っ張られながら走る。
もう、わけが分からない・・・
息が切れる・・・
雪が引っ張るのをやめる。
まわりは真っ暗・・・
なんにも見えない・・・
こんなとこあったっけ・・・？
すると、
「ここだよ。」
急にまわりが見えるようになった。
ここは・・・道路！！
なんで？目の前が光る・・・
あれ？トラック・・・
足が動かない。
どうしよう・・・
なんでこんな事に・・・
誰か、助けて・・・助けて・・・

## 【第2話：危険】（後書き）

書くのってタイヘンですね・・・

## 【第3話：山里雪】

やだ。死にたくない。
雪ちゃん？あれ・・・？
どこ？いない・・・
どうして・・・？
足が言うことときかない。
助けて・・・誰か・・・
助けて・・・！！

っ・・・腕が引っ張られた。
バランスを崩し、
倒れこむ。
ここは？どこ？
トラックはもうない。
ってことは・・・
見るとここは歩道。
あれ？
あたしの腕を引っ張ったのはだれ？
雪ちゃんは？
さっきのは何だったの？
どーゆーこと？
何があったの？

「歩李！」
声。この声は・・・
声のする方向を見る。

千里・・・?!
「お前っ・・・何してんだよ・・・っ!」
息が切れてる。
「何で千里がここに?」
すると千里は怒鳴るように、
「何で急に、道路のド真ん中に、
飛び出してったんだ?!
オレが、ついてってなかったら、
お前っ・・・死んでたぞっ・・・!」
あぁ・・・そっか・・・
雪ちゃんに引っ張られて・・・
それで・・・
でも、雪ちゃんはどこに?
姿が見当たらない。
「・・・千里、雪ちゃん知らない?
さっきまで道路の真ん中にいたはず・・・?」
千里はバカにしているような目で
あたしを見た。
「雪?ああ、あの転校生の山里か?
いなかったぞ。何いってんだよ?」
うそ。ウソ。いたのに。
なんで。雪ちゃん。どこ?
もう何もわかんない。
分かん・・・ない・・・
!!
雪ちゃん!!
雪が立っている。
とても悔しそうな表情で。
そして、走り去った。
急いで追いかける。

雪が角を曲がった。
歩李も曲がる。
けっこう足は速いほうだ。
でも雪の姿はない。
隠れる所もない。
消えたのか？
できるはずがない。
それなら、雪はどこ？

雪が千里の前に
現れる。
「あれ？山里？！
歩李が追いかけてったぞ？
おい！」
雪は千里に近づく。
そして、
「お前は歩李をいつもしつこく
心配している奴だな？
フッ・・・
それなら大変だな。
もうすぐ・・・
あいつは死ぬんだから。
あはは・・・
あはははははっ！」
雪が狂ったように笑い出す。
そしてまばたきした瞬間・・・
雪がいない。
消えた？

1秒もない時間で？
あり得ない。
死ぬってどういうことだ？
あいつは一体何者だ？

「雪ちゃん・・・
一体何者なの？」

「ふーん・・・歩李・・・かぁ・・・あはは・・・」

## ［第3話：山里雪］（後書き）

読んでくれて、
ありがとうございます！

## 【第４話：幽霊が見える】

「山里・・・」
千里は考えこむ。
一体山里は何者なんだ・・・？

すると目の前に、小学生くらいの
子供が立っている。??
いつの間に?その子供は道路の方に、
スーっと・・・
吸い込まれるように歩き出す。
って、え?
「待て!危ねーぞ!オイ!」
その子供は車に気づかない。
ヤバイ!
「待てって!オイ!・・・」
車がその子供に突っ込んでいく。
なんで気づかない?
?
子供がいなくなっている。
?
どこだ?
吹き飛ばされたのか?
じゃあ・・・
?!
さっきの子供が向こう側の歩道にいる。
確かにさっきの子供の顔だ。
何でだ?
な・・・?!

足がない・・・
透けてる・・・？
まさか幽霊・・・？
ってオレ、疲れてるのか？
そーいえば運動会もあったし・・・
だから透けてるように
見えるんだよな。うん。
よし。帰って寝るか。
「あのー・・・」
肩をたたかれる。
「ん？あっ！！」
さっきの子供！！
間違いない・・・
というか、いつの間に・・・？
「・・・なんだ？」
オレはそのガキに話しかける。
ガキはびっくりしている。
「オレに何の用だ？」
「あ、いや・・・ボクは幽霊なんだ。」
いきなりそんなことを言い出す。
でもまあ、からかってるのかもしれない。
さっきのも、オレが疲れていただけだったのかもしれない。
小学生くらいの年はウザいからな。からかってるんだ。
「おいガキ。早く家に帰れ。
　幽霊なんているわけねーだろ。」
そう言ってやった。
・・・ちょっと大人げねーかもしれないが。
「っ・・・ほんとだよっ！！」
するとそのガキは足をオレのほうに向けた。
そうなんだと思う。だが、足はない。

・・・？
「ガキ。これ夢か？それともマジックか？」
するとガキは悲しそうに、
「どっちでもないよ。ボク死んじゃったんだ。」
死んだ・・・？んなことあるわけ・・・
「じゃあ、おにーちゃん・・・ある男の子がお父さんとお母さんに、
殴られて死んじゃったってニュース知ってる？」
そういえば母さんが言ってたな・・・
そんな話。
「おかしいね！！そんな親！」
とか怒ってたな・・・
「それが何だ？」
「あのね・・・どうしよう・・・
信じてくれる？」
悲しそうな顔で聞いてくる。
「内容によってだな。」
「内容？なにそれ。」
こいつなんにも知らねぇのかよ！
「・・・いいから話してみろ。」
「うん・・・あのね、ボク・・・
殴られて死んじゃったのは・・・
ボクなんだよ。だから幽霊なの！
信じてよ！ほら見て！」
ガキはズボンを少しめくる。
すると、ところどころ腫れていたり
打撲になっていたり・・・
「幽霊ってホントか？」
少し・・・少しだけ信じてやるか・・・
するとガキはゆっくりと、うなずく。
「おにいちゃん・・・みんなは

気づかないのに、おにいちゃんは
気がついてくれた・・・
おにいちゃん、幽霊見えるの？」
幽霊が見える・・・？
オレが？
幽霊が見える？
「つーか、ガキ！オレはお前のアニキじゃねーぞ。」
そう言うオレに、ガキはよく分からない表情をして、
「ボクよりおにいちゃんだから！」
・・・！こんな小さいガキを殺す？
なんてバカな連中だ・・・
くそっ・・・
「おにいちゃん・・・
いっしょにお話してくれて
ありがとう・・・
ボク、人間界にいられる時間が
もうないんだ・・・
ホントにありがとう・・・！」
ガキは笑っている。
虐待をうけて殺されたのに笑っている・・・
「ボク、この世界に来れてよかった！
最期におにいちゃんに会えたから・・・
バイバイ・・・おにいちゃん・・・」
「ガキッ！！オイ！」
ガキの姿が消えていく。
そして・・・
「ありがとう・・・
おにいちゃん・・・」
「ガキッ！ガキィィィィ！！！」
ガキは消えた。知らなかった・・・

こんな悲しい幽霊もいるのか・・・・
くそっ・・・
じゃあな・・・・
ガキ・・・・・・・

## ［第４話：幽霊が見える］（後書き）

読んでくれて、
ありがとうございます。

## 【第5話：ナゾだらけ】

幽霊・・・ねぇ・・・
千里は授業中ずっとそんなことを
考えていた。
普通ではありえない。

帰り道。
人が通らない細い道で
誰かが千里の肩に手を置いた。
「ゆ・・・雪・・・？」
雪がいる。
何で雪が・・？
「佐野千里・・・
　歩李は霊界に連れて行く。
　お前はその時レニア様が
　お望みになったようにする。
　覚悟しておけ。」
おいおい・・・いきなり何言うかと思ったら
霊界？意味分んねーよ。
レニア？誰だそれ？
「いきなり何言ってんだよ？
　霊界？何だよそれ。」
でもオレが会った幽霊のガキ・・・
もしかしてホントにそういうのって
あったりして・・・
「信じるかはお前しだいだ。」

そう言い残して雪は消えた。
消えた・・・？
何なんだ・・・もうワケ分かんねえよ・・・
幽霊・・・霊界・・・レニア・・・
くそっ・・・歩李はどうなるんだよ？
雪・・・

―中学校の帰り―
「歩李！帰るぞ！」
千里が久しぶりに声をかけてきた。
「え？なんで最近だまってたと思ったら
　また・・・ま、いいけど。」
もう気にしないことにした。
この前、助けてもらったし。
「ねえ・・・千里はいつあたしと
　知り合ったんだっけ？覚えてる？」
千里に聞いてみた。
「え・・・？幼稚園のころにお前が
　転んだ時にいっしょに先生のとこに
　行った時になんか仲良くなって・・・」
「うん。あの時はあたしのほうがちょっとだけ
　背が高くて・・・今じゃ追いこされちゃったけど・・・」
あれ？・・・千里はいつの間に背が高くなったの？
いつの間に声が低くなったの？
いつの間に・・・
千里があたしから離れてく気がした・・・
千里・・・
あたしはなんか、悲しくなった。
なんでだろう・・・？

## ［第5話：ナゾだらけ］（後書き）

書くのが、遅くなってしまいました・・・
すいません。

## ［第６話：ゴースト・シティ］

雪はなぜか不思議な服を着ている。
その色は冷たく積もる雪よりも白い色をしている。
そして上下が分かれていて、
昔の男用の着物のような服だった。
雪は目をつぶった。
そしてこう唱えた。
「ゴースト・イン」
雪の姿が消える。

ここは空の上のゴースト・シティ。
死んだ者・幽霊が来る場所である。

雪がある者の前に歩いて来て、止まった。
雪がひざまずいた。
「レニア様・・・ご命令を・・・」
その者は雪に笑いかける。
「命令・・・ねぇ・・・
それじゃあ・・・」

雪が不思議な服をきている。
それは白く、上下のわかれている昔の
男用の着物のような・・・
不思議な服から、歩李達の中学の
学生服へと変わった。

「命令は成功させます・・・
あの日の私の苦しみも
奴にも味わってもらわなければ・・・
ご安心くださいませ・・・
すべてはレニア様の為に・・・・」

「ゴースト・アウト」
雪は消えた。

そのころ歩李たちは、
「うわ・・・寒ッ・・・あー・・・ヤダなぁもう・・・・」
秋と冬の中間のの寒さと戦っていた。
「ビミョーに寒いぞ・・・なんかもう・・・
夏休みにもどりてー・・・・」
「夏休みとかのときは冬になれッとか思ったのにー・・・・
いざ冬になると今度は夏になれッとか
思っちゃうんだよねー・・・・」
そんなことを千里と話していた。

雪が学校の屋上にいる。
ゴースト・シティから戻ってきたのだ。

すると少し身震いし、
「こっちは寒いな・・・
ホントはこんなところ二度と来たくないのだが・・・
レニア様の命令だからな・・・」
雪は教室へと階段を下りた。

「今からテストやるぞー」

「えええぇぇー・・・」
みんなのテンションが下がる。
歩李はテストはトクイだ。
テストの点は、当たり前のように
いつも平均をこえている。
千里は・・・ちょっとニガテというカンジだ。
その時によってテストの点数が大きく変わる。
雪は全くダメだ。勉強には興味ない。
多少問題には答えるが、ほとんど空欄で
提出している。
そんなカンジでテストは終わった。

―中学の帰り―
「歩李ちゃん・・・
いっしょに帰らない？」
雪が歩李ににっこり笑いながら話しかけた。
「え・・・」
雪ちゃん・・・？
あたしをトラックにひかれるように
道路の真ん中まで連れて行ったのは
雪ちゃんだった。なんで
その雪ちゃんが・・・？
「雪ちゃん・・・あの時なんで
道路も真ん中にあたしを連れて行ったの？
殺すつもりだった・・・とか？」
恐る恐る聞いてみる。
「え？なにが？私が歩李ちゃんを？
まさかぁー」
雪は、歩李が冗談を言っているかのように

笑っている。
そんな・・・あの時のは夢？
まさか・・・
「だってそーでしょ？歩李ちゃんは
私の大事なトモダチだもんッ！」
「えっ・・・・」
雪は少し照れている。そして、
「トモダチだよ！」
そう笑いかけてきた。
あれ・・・？あっ・・・
そーだよ・・・トモダチだもん・・・
そんなことしないよね！
「うん！そーだよね！ごめんねー」
歩李は雪と帰ることにした。
夢。そう、あれは夢だったんだよ。
目が覚めたらベッドに寝てたし・・・
夢なんだよねッ！！

そう歩李が信じきった時、
「なんてね」
そう雪は笑っていた。
さっきの笑い方とは全く反対の笑い方。
その開いた口は闇を想像させた。
そして目は・・・
恐ろしいほど黒く、
希望や幸せなどの感情の欠片もなく、
まるで人間の目ではなかった・・・
とにかく、思わず身震いをする笑い方なのだ。
歩李はどうなってしまうのか・・・？
雪は何をしたいのか・・・？

## ［第６話：ゴースト・シティ］（後書き）

大変遅くなってすみません・・・
読んでくれてありがとうございます。

## 【第7話：大雨】

「歩李ッ！！」
千里が走っている。
「チッ・・・雪か・・・？
また前みたいなことに
なってなきゃいいが・・・」
歩李を探して走る。
「まさかまた一緒に帰ってたり
してるかもしれねえな・・・」
そしていつもの通学路を走る。

途中で歩李が角を曲がるのが見えた。
「歩李ッ！！」
急いで追いかける。
「歩李・・・」
雪がいる。歩李のとなりに
雪がいる。
「歩李！！山里からはなれろッ！！」
雪がこっちを向く。
「もう遅い・・・」
雪がニタリと笑った。
そして歩李の手首をつかみ、
地面から浮く。そして宙を蹴る。
千里はその雪の足首をつかんだ。
すごい速さでそのまま上へとのぼっていく。
「ッ？！放せッ！！」
雪が足を振る。
「わっ！！危ねェな！落ちるだろ！！」

千里が必死で叫ぶ。
「落ちればいい！お前などジャマなだけだ！」
また雪が足を振る。
「わっ・・・」
落ちる！そう思ったとき、
「キャアァァァッ！！」
歩李が叫んだ。
歩李は雪の手から放れ、
落ちていく。
「歩李ィィィ！！」
千里は雪の足首を放し、歩李に手をのばす。
「させるか！！」
雪も同じく手をのばしてきた。
とどけ・・・とどけとどけとどけッ！！
そしてついに・・・
千里が歩李の手をつかんだ。
そのとたん、勢いよく落ちていた2人が
急にゆっくりと落ちていく。
ゆっくりと・・・
「え・・・？なに・・・？」
「なんでこんなゆっくり落ちてるんだ？」
2人は手を放す。すると・・・
「わァァッッ！」
いきなり勢いよく落ちる。
そして手をつかむと、ゆっくりと落ちる。
そして2人はそのまま手をつないで
地面を目指す。

やっと足が地面につき、手を放す。

それと同時に雪も地面に足をつける。
「山里・・・」
「歩李をわたせ。」
雪はニヤリと笑う。
すこし背中がゾクゾクする。
するといきなり雪が勢いよく真上に右手ををあげ、
手のひらを大きく開いた。するとさっきまで
晴れていた空が、いきなり雨雲におおわれた。
数秒で大雨がふりだす。
「レニア様！」
雪が大雨の空に顔を向ける。空から人がおりてくる。
「レニア・・・だと？！」
そしてどんどんと・・・レニアと呼ばれた者が、
ゆっくりと地上におりてくる。
千里と歩李はその場で動けなくなってしまった。
「レニア様・・・この者たちが歩李と千里です・・・」
雪がおりてくる者に話しかけた。そしてその者は、
「よくやったな、雪！！」
雪をほめた。そして歩李と千里に言う。
「・・・貴様たちが私の探して
いた奴等か・・・面白い・・・」
そしてレニアはゆっくりと地上に足をつけた。

## 【第7話：大雨】（後書き）

大変遅くなってしまい、
申し訳ありません・・・
見てくれてありがとうございます！

## 【第8話：兄弟】

いまだに雨が降り続ける。
「うるさいな・・・」
レニアがそう言うと、雨の音が
少しだけおさまる。
「うるさいな・・・」
そう言って、一粒の雨を手のひらで受け取り、
思いっきりにぎった。
すると、雨が一瞬で止んだ。
「ホントにお前何者なんだよ・・・？」
千里がレニアに聞く。

「何者・・・だと？」
そして悲しそうな・・・顔をした。
「やはり聞いていないか・・・」
「何だよ？」
千里が聞くと、
「・・・私のことに決まっているだろう」
レニアの声が少し大きくなる。
歩李はそれに少しおどろく。
「・・・私のことを知らないのか？」
千里は意味が分からない。
「なにを聞くんだよ？」
するとレニアは自分の手を強くにぎる。
「お前には兄がいるだろう？」
レニアの声が耳に響く。
兄・・・？そんなの聞いたことがない。
千里に兄弟はいないはずだ。

「何言ってんだよ？　オレに兄弟はいないぞ？」
千里はそう言った。
レニアは冷静にこう言う。
「いや・・・そんなのダレから聞いた？
そう、感じているだけだろう？兄弟はいない、と。」
「だーから、兄なんていねーんだって・・・」
「何度も言わせるな。おまえには兄がいるんだ。」
しばらくの間、沈黙が続く。

「・・・・・・んなことあるワケねーだろ！
もし・・・もしそーだったとしても・・・
いや、ない！だってオレ、母さんとかになにも聞いてねーし！」
レニアは不気味に微笑む。
「・・・やはり皆、話していないのか。」
「は？だから、ワケ分かんねェよ！」
すると歩李が、
「もしかして・・・その兄は、ずっと前に死んじゃった・・・とか？」
と言う。
「・・・そのとおりだ。」
「その・・・じゃあ・・・
その死んじゃったオレの兄って・・・ダレなんだ？」
千里がそう言うと、レニアが静かに口をあける。
「私だ・・・。」
千里の目が見開かれる。
「なッ・・・」
「・・・私は貴様の兄・・・佐野千里の兄だ・・・」

## ［第８話：兄弟］（後書き）

大変遅れてしまいました・・・
すいませんッ！！

## 【第9話：ウソ】

「・・・私は貴様の兄・・・佐野千里の兄だ・・・」
まさか。
証拠なんてないし。
兄なんて聞いたコトもない。
なに言ってんだ？コイツ・・・
レニアの目は真剣に千里を見つめている。
冷たい風が千里の頬に触れる。
”ありえない”
「証拠は・・・どこだ・・・？」
レニアは手を前に出し、何か呪文のようなもの唱えた。
すると地面が光る。
「さぁ・・・見てみろ・・・」
レニアがそう言ったとたん、地面の光ったところが
映像のように動き出し、音が聞こえてくる。
＜千里？いるの？＞
「母さん・・・？」
千里の目は地面に映っているものに釘付けになる。
その地面には、千里の母が映っていた。
「なんでだよ・・・？？」
レニアはその地面の映像をみながら、
「いいから黙って見ていろ・・・」
そう静かに言った。
その目はさっきと違ってなぜか、ひどく悲しそうだった。
「・・・・・？」
千里は不思議に思いながらも、その地面の映像をじっと見つめる。
＜・・・いないのかしら・・・？＞
千里の母はタンスの引き出しを開ける。

洋服の間から何かを取り出す。
透き通ったガラスの写真たてだ。
何で写真たてなんか取り出すんだ・・・？
その中に入っている写真。
子供・・・？誰だろう。
オレの写真じゃないな・・・
千里の母はしばらくその中の写真を見つめる。
すると千里の母の肩が震えだす。
＜・・・れいと・・・零斗・・・！＞
写真たてに涙が落ちる。
「母さん・・・？？」
千里の母は写真を見て泣いていた。
れいと・・・零斗？誰だよ？？
なんでその写真を見て泣いてるんだ？
「・・・もう少し写真が見えるようにしてやろう・・・」
レニアが手を前に出す。
写真がアップで見れるようになる。
そこには4～5才くらいの男の子が写っていた。
相変わらず千里の母は肩を震わせて泣いている。
「誰だよコイツ・・・？」
千里はそう言った。
その言葉に対し、レニアは
「私だ。零斗・・・生きていたころの私の名前だ。」
レニアは映像から視線を逸らさず・・・懐かしそうに、そして寂しそうに目を細めて言った。
確かにレニアには、写真の男の子の面影がある。
「・・・分かんねェだろ・・・聞いてみなきゃ・・・」
千里が呟くように言う。
「オレ・・・聞いてくる・・・母さんに確かめてくるッ！！！」
そう言うと、ものすごい速さで走っていってしまった。

「千里・・・」
心配そうに言う歩李。
「急に連れてきて悪かったな。」
レニアは歩李に言った。
そして、歩李はレニアに向かって言った。
「・・・あなたが千里のお兄ちゃんってホントなんですか・・・？
死んじゃったってどういうコトなんですか・・・??」
その質問に対し、レニアは少し黙り込む。

少しして、
「私は千里の兄・・・佐野　零斗だ。私は5歳ほどで死んだ。」
その答えに歩李はすぐに、
「なんで・・・死んじゃったんですか??」
とまた質問する。
レニアは答えようと口を開く。
「それは・・・」

千里はそのころ、家までの道をずっと走っていた。
兄。兄。兄。・・・零斗・・・
そのことをずっと思いながら走る。
家の近くの曲がり角を勢いよく曲がる。
家が見えてきて、スピードがあがる。
家のドアの前に立つ。
インターホンを押し続ける。
出て来ない。なんでだ・・・？
「はーい」
！　母さんの声がした。
ガチャッ・・・

家に帰ってくるとき、いつも聞くドアの開く音。
「！！　あ・・・千里・・・おかえりなさい」
少し様子がおかしい。
よく見ると涙のあとが微かに残っている。
・・・ちがう。
母さんがオレにウソなんてつくワケない。
兄がいたコト・・・黙ってるハズがない。
千里は一度、家に入りドアを閉めた。
ガチャン・・・
この音がした瞬間、家の中がシーンとする。
千里の母もずっと黙っている。
母は無理に笑顔をつくって、
「せ・・・洗濯物！早く出してね！！」
そう元気に言った。
我慢できずに千里は、
「母さん・・・オレにウソついてない？今までの間、ずっと・・・」
直球に聞いてみた。
母さんはオレにそんなウソつかない。
そう自信があったからだ。
だが。
千里の母の手が少し震える。
「ウソ・・・？なんのコト・・・？」
明らかに怪しい・・・？！
ウソだ。絶対。
もう一度聞く。
「兄弟がいた・・・とかはない？」
その言葉をきいた瞬間、千里の母の目が見開かれた。
「・・・！！何で・・・その事を・・・？」
え？どーゆー事だ？おい！
「母さん・・・！！おい！ウソだろ？！」

千里の母はうつむいたままだった。
ウソだ！
「千里・・・」
お願いだから言わないでくれ！
母さん！！
「ごめんね・・・千里・・・」

「ウソ・・・だろ？」

## 【第9話：ウソ】（後書き）

お疲れ様でした。

## 【第１０話：思い出す】

「ウソ・・・だろ？」

千里の母はうつむいたままだ。
「おい・・・母さん！兄なんていないだろ？」
母は答えない。
「兄がいるのか？オレには・・・」
母はコクリとうなずく。
「・・・兄の名前って・・・零斗？」
母は、その言葉にハッと顔を上げる。
「なんで知っているの・・・？記憶がなくなったんじゃ・・・？」
千里はその質問に答えずに、
「どうして兄は死んだんだ？」
と、母に質問をする。母はまたうつむいてしまった。
「なんでだよ？！」
もう一度聞く。
「・・・零斗が死んだ理由？」
「そう。なんでだよ？」
母は少し黙る。そして。
「それは・・・零斗が死んだのはね・・・」

レニアは口を開いた。
「私が死んだのは・・・交通事故、だ。
・・・ぐ・・・偶然走ってきたトラックにひかれて・・・」

―偶然走ってきたトラックにひかれて―

レニアはその言葉を少し考えてから言った。
「え・・・？なんで千里は覚えてないんですか？」
「それは・・・軽い記憶喪失になったのだ・・・
私のことだけを忘れてしまう、という・・・」
レニアの表情が曇った。
「なんでですか？！」
歩李がまた質問する。
「それは・・・」
レニアは、それから黙ってしまった。

「零斗は、千里をかばって・・・トラックにひかれたの・・・」
以外すぎる言葉に、驚く。
「なんだよそれ・・・」
千里はありえない、とばかりに言った。
「どういうことだよ？くわしく教えてくれよ！！母さん！」
そう叫ぶように言った千里に、少し驚き・・・
でもすぐに真顔に戻って。

「・・・分かったわ。話してあげる。
零斗はね・・・その日、千里と公園に行ってたの。母さんもね・・・
・
ボールで遊んでたわ・・・それで・・・運が悪かったのね・・
ボールがね・・・本当に運悪くて・・・道路に、ポーンって・・・
転がっていっちゃったの・・・それを何も知らない千里・・・
あなたがボールをおいかけて行っちゃって・・・」

母が言葉を切った、そのとき。

ドクン。

息がつまる。ボール。手からはなれて。うしろに、うしろにとんでいくボール。

道路に転がってしまった。自分は、走った。待て、待て、ボール。

千里！千里！

声がする。でも、あのころの自分には、聞こえていないようだった。

ドクン。

息切れしていた。おぼえている。零斗。お兄ちゃん。・・・思い出した。

「ボールを追いかけてね・・・千里が、走って行っちゃって・・・それで・・・トラックが来ていたの。でも千里は気づかないで、道路でとまっているの・・・

母さん、千里のところにはしっていったのよ。でも・・・

・・・零斗のほうが速くって・・・零斗は、千里を歩道に押し戻して・・・かわりに・・・

鈍い音がしたわ。零斗は・・・倒れていて。頭からの出血が、すごくて・・・！！」

千里は、もう母の話は耳に入っていなかった。

ドクン、ドクン。

ボールをもって。お兄ちゃんが走ってきた。

千里ッ・・・

お兄ちゃんはオレの手をひっぱって。痛かった。歩道にオレは倒れこんで。
ドンッと音がして。

気が付くと、お兄ちゃんは道路に倒れこんでて。血が、ドクドクとから流れ出ていた。
オレは、なぜか怖くなって母さんにかけよって。でも。
母さんはフラッとして、ひざを地面に膝をついた。
オレの肘からは、血が出ていた。痛い。でも。
お兄ちゃんほどでは・・・なかった。

ドクン、ドクン。

「病院に運ばれたけど・・・ダメだったの。ッ・・・う・・・零斗・・・！！
だから、零斗はあなたを・・・千里をかばってくれたのよ・・・！！
あなたは忘れてしまったようだけど・・・ッう・・く・・・」
母は、泣き出す。千里は勢いよく立ち上がり、
「思い出したよ・・・ありがとう。母さん・・・」
千里は、家を出た。
走る、走る。歯を食いしばって・・・風が、こんなに冷たくて痛いとは、知らなかった。
それほどに、走った。
思い出したんだ、レニアのこと・・・いや、兄である零斗のことを。

## ［第１０話：思い出す］（後書き）

遅くなりました。
見てくださってありがとうございます。

## ［第１１話：歩李の幽霊日記］

走る、走る・・・千里はただひたすら走る。
零斗。・・・兄。思い出したよ。
歩李を置いてきてしまった・・・確かこの辺りの暗くて細い、家が一軒もない道だった。
・・・あった。
その角を曲がると・・・
「どうして??なんで千里は記憶喪失になったの??」
歩李がレニアに質問を繰り返しているところだった。
息切れした千里。膝に手を置き、少し前かがみになる。
「・・・千里・・・どうしたの?」
千里に気づいて、歩李がかけよってきた。
だが千里には、歩李は見えていなかった。
「ホントに・・・零斗、なんだよな?・・・オレの兄、なんだよな・・・?」
レニアは千里を見つめて、
「母さんに聞いてきたのだな?やはりそうだっただろう?」
という。無表情のまま。つぎの瞬間。
レニアは、驚く。
「思い出したんだ!!ありがとう・・・!!レニア・・・いや、兄貴・・・!!」
ありがとう。ありがとう?
レニアは、そう言われてどうしていいのか分からなかった。
「あ・・・兄貴は、オレのことをかばってくれたんだよな?
オレ・・・そんな兄貴のこと忘れてたなんて・・・ゴメン、兄貴・・・
ありがとう・・・ホントにありがとう・・・!!」
レニアだけでなく、歩李も驚いていた。

イキナリありがとうを連発して。こんな千里は見たことなかった。
「どういうことなの？千里・・・？」
そう聞くと千里は、なんだかうれしそうに言った。
「母さんに聞いて、完全に思い出した！！レニアは・・・零斗はおれの兄貴だったんだ！
それで、小さいころボールで遊んでたら・・・ボールが道路にころがってっちゃって・・・
まだ何も知らないオレは、道路に飛び出しちゃったんだ・・・で、トラックがきて・・・
ひかれそうになったとき、兄貴は身代わりになってくれて・・・
オレを助けてくれたんだ！！なあ、そうだろ？兄貴！！ありがとう！」
レニアに向かって何度もお礼を言った。だが、少しすると千里の表情がいきなり曇った。
「ゴメンな・・・兄貴。オレのせいで死んじまったんだよな・・・ごめん・・・」
この言葉にも、レニアは驚く。そして、千里は・・・
「でも・・・どうして、歩李を連れていこうとしたんだ？」
千里は、目を細めていった。
その言葉を聴いたレニアは動かない。答えない。沈黙が続く・・・
「それ、は・・・」
レニアは困ったようにいった。千里はレニアをじっと見つめる。
「それは・・・そうすれば・・・貴様・・・千里が来ると思ったからだ・・・」
「え？」
千里は思いもしなかった言葉に驚いた。
「私の・・・存在を知らなかったのだろう？だから・・・伝えたかったのだ・・・だから・・・それだけだ。」
レニアはそう言った後、歩李を見た。
「歩李、と言ったな？・・・すまない。こんなことに利用してしま

って・・・」
レニアはそう、歩李に言った。
「え？そんなこと・・・もう、いいですよ！ビックリしたけど、なにもなかったし。
だから・・・もう、いいんです。」
歩李の言葉に、レニアはとまどった。千里の言葉にも、とまどった。
そのとき。
「ッきゃ・・・？！」
雪が、歩李の制服のえりをつかんだ。千里とレニアはすぐに2人を見た。
「雪ちゃ・・・なにするの・・・？」
歩李が雪の手をどけようとする。が。雪はものすごい力で歩李の制服のえりをつかんだままだった。
「雪！やめろ！なにしてんだよ？」
千里も雪の腕を歩李から離そうとするが、だめだった。
「許さない・・・許さない・・・歩李・・・！！
よくも・・・私を殺したな・・・！！よくも・・・！！！」
雪の言葉に、千里と歩李は一瞬動きを止めた。
「・・・え？」
なんのことか分からなかった。だって・・・殺した？雪ちゃんを？いつ？？あたしが？？
「なに言って・・・るの？雪ちゃん・・・？？」
「とぼけるな！」
雪は叫んだ。歩李は黙った。
「お前が・・・私を階段から突き落とし・・・殺したんだろう！そうだろう！！」
雪はそう言った瞬間、レニアの方を向く。
「そうなんですよね？レニア様・・・！」
歩李と千里はその言葉を聞き、レニアを見た。
「そ・・・それは・・・」

「言ったじゃないですか！レニア様！
私を殺したのは、歩李という者だ。仕返ししたいのだろう？なら、連れて来い。
と、言いましたよね？レニア様！！」
レニアは、うつむいてしまった。千里は
「なんでだよ！なんでそんなこと言ったんだよ？！歩李はなにもしてねェだろ？？？」
と言った。
「ウソ・・・なのですか？レニア様・・・」
悲しそうに雪はレニアに言った。そんな雪に対し、レニアは顔をあげゆっくりといった。
「すまない・・・雪。ウソ・・・だ。雪が自分をころしたヤツを探しているのを知り・・・
私は・・・千里を連れ出すのに使える、と思って・・・」
「利用・・・したんですね、私を。」
レニアは雪を見た。
雪は手を放した。歩李はドサッと地面に座り込んだ。
「すまない・・・雪・・・でも、会いたかったのだ。千里に。命を捨ててまで守った、弟に。
だから・・・許してはくれないか？？」
レニアは雪に頭をさげた。しばらくの間、ずっと。
「分かりました・・・。もういいです。」
苦しそうにそう言うと雪は地面を強く蹴って、宙に浮かんだあと・・・空へ消えた。
「レニア・・・零斗さん・・・そこまでして千里に会いたかったんですね・・・」
「ああ。そうだよ・・・迷惑かけたな、2人とも・・・
千里・・・あえてよかったよ。それじゃあ・・・私は・・・」
と少し宙に浮かぶ。
「兄貴・・・じゃあな。」

千里はレニア・・・零斗にそう言った。
「雪ちゃんのこと・・・もう、ウソはつかないであげてください。」
歩李が言った。レニアは目を細めて、
「ああ。そうするよ・・・。」
と言って、空へ消えていった。

「よかったね・・・千里。お兄ちゃんに会えて。」
「ああ。でも、もっとフツーに会いたかったなぁ・・・」
そう言った千里に、
「もう、これで、終わったのかな？」
と歩李が聞いた。
「分かんねぇけど・・・終わったのかもな。」

―しばらくして―

雪の記憶は、みんなから消えていた。
雪のことをおぼえているのは、千里と歩李だけだった。
その日、歩李と千里のクラスの担任が転校生をつれてきた。
「山里　雪です。よろしくお願いします。」
え？千里と歩李は顔を見合わせた。
雪は、歩李のとなりにあいている席に、座った。
「おかえり・・・雪ちゃん。」

帰り道。３人で帰る。

校門のちかくにいる何人もが同じことを話していた。
「3年にカッコイイセンパイが転校してきたんだって！！」
「知ってるー！！零斗って人でしょ？？」
「あたし見たことあるよ！・・・あ、ホラ！こっちに向かってくる人！！」
千里、歩李、雪の3人はそのセンパイを見た。そして3人は笑顔で言った。
「おかえり！零斗センパイ・・・！」

7月23日（金）

ということで、レニア・・・じゃなくて零斗センパイは、
人間になって戻ってくることができました。
千里のお母さんはビックリして倒れちゃったらしいけど、なんとか慣れたようです。
いろいろタイヘンだったケド・・・今思うと楽しかった気がします。
これからもあたし、千里、雪ちゃん、零斗センパイで仲良くしていきたいと思ってまーす！

～END～

## ［第１１話：歩李の幽霊日記］（後書き）

イキナリですが、最終話です。
今まで見ていただいて、ありがとうございました！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7000c/

歩李の幽霊日記

2010年12月8日22時35分発行